



# この人を たずねて

中京大学大学院心理学研究科 教授

## 河原純一郎氏

インタビュー  
山川香織



**Profile** — かわはら じゅんいちろう  
広島大学教育学研究科博士課程後期修了。博士（心理学）。広島大学教育学部講師，助教授，産業技術総合研究所主任研究員などを経て，2012年より現職。専門は知覚・認知心理学，人間工学。著書は『心理学の実験倫理』（共編，勁草書房），『キーワードコレクション 認知心理学』（分担執筆，新曜社），『感覚知覚ハンドブック増補版』（分担執筆，誠信書房）など。

### ■ 河原先生へのインタビュー

—先生は注意研究のどのようなところにご関心をお持ちですか？

注意は幻のようなものです。注意そのものは存在し得なくて，ある二つの状態，つまり注意していないときと注意しているときの差分でしかありません。注意について教えてほしいと訪ねてくださる企業の方に「注意は差分でしかなくて実体はありません」というと，ハア？という顔をされますが（笑）。そんな幻である注意を私たちはどこまで制御できるのかを知りたいと思っています。

—心理学はどの分野も，実体がなく差分でしか捉えることのできない内的状態を取り扱っていますね。では私たちはその実体のない現象である注意を把握できているのでしょうか？

私たちは注意を正確にモニタリングする能力，つまり注意のメタ認知が欠けていることが特徴のひとつだと思います。注意研究では注意のスポットライトは一つだと言われていますが，実際はどうで

しょう？ 普段，運転するとき信号にも歩行者にも注意していると思っていますよね。分割できると過信しています。これを検討してみたところ，やはり実際のスポットライトは1カ所でしたが，参加者は複数箇所に注意分割していたと報告しました<sup>1</sup>。実際の注意とメタ認知の注意には隔たりがあるんです。

—私たちは注意を修正することはできますか？

残念ながら，注意のエラーにはなかなか気づくことができません。私が行った標的刺激に反応をしてもらう実験で，誤った注意方略の認識をしている方に正しいフィードバックを与えても，方略は訂正されませんでした<sup>2</sup>。記憶のエラーは訂正されますが，注意の失敗には気づきにくく，フィードバックが効きにくいでしょう。これは研究者である私たちも同じです。

—研究をする私たちもヒトなので見落としていることがあるかもしれないということでしょうか？

そうですね。注意の研究者は実

体のないものに対してさまざまな定義をし，あれもこれも注意だと言っています。それらの研究者がそれぞれ捉えている注意が同じものなのか，調べてみたことがあります。

この業界では，注意は意図的制御可能派（多数派）と不可能派（少数派）に分けられます。それぞれ課題は違うものを使っていますが，どちらも注意は意図的に制御できるかという同じ概念を取り扱っているはずですよ。なのに，それぞれの課題を同じ参加者に行ってもらって課題間の相関をとってみると無相関でした<sup>3</sup>。この結果は私の中ではすごくショックでした。われわれ研究者は幻のまぼろしをみていたのかと思ってね。研究者自身のメタ認知とずれているような気がします。取り扱っている現象を正確に捉えられているのか，そこが大切だと思います。

—先生は現在，どのようなご研究に携わっていらっしゃいますか？ その際に，ご自身の研究を正確に捉えるために心がけている点などありましたら教えてください。

最近では疲労と注意資源の関係の他に，対人魅力と注意についてもプロジェクトを始めました。別のテーマに参入してゆくのは容易ではありませんが，やりたい気分のほうが直面する困難を上回っている限りは努力したいと思います。そのとき，自分では面白いと思っていても，他人からしたら重箱だか何かの隅をつついていただけかもしれません。それはIFやH-indexを見たら生々しくわかります。アイデアを思いついて努力して実験して，挫折しつつ刊行して，引用が少なく孤独を学んで，自分のスケールを悟るのでしょう。

—先生は長い間つくばにある産業総合研究所で研究者としてご活躍されていましたが，どのような変化がありましたか？

先の大地震直後に恥づかしながら四国へ逃げ出して、畑仕事をすする義父を手伝ったときに、自分は何を生産しているのかを考えました。30歳代までは論文を書いて世の中に私の存在を知らしめることが重要だと思っていました。しかし震災を機に、業績を増やすことは何かを生産しているように見えるけど、誰のためになるのだろうかと思ったんですね。今の時代、論文は山ほどあって電子の海に漂っているでしょう？これは生産といえるのだろうかとか疑問を感じました。ちょうどその頃、教え子が就職するという知らせを受けました。アカデミックな実子の独り立ちは初めての経験で、とても嬉しかった。個人レベルでの実子である論文は、何度か引用されて、いつか賞味期限が切れて絶命する。ですが組織レベルの実子である学生さんらは彼ら自身でまた命を作ってくれるでしょう。そういうことがある職場で望みを繋げることは大切だと思うようになりました。今は自分の遺伝子を学生さんの研究生活を通して残せたいいなと思っています（もちろんわたくし自身も論文も書きつつ）。

——最後に、心理学を学んでいる人たちに向けて一言お願いします。

偉そうなことは言えませんわ(笑)。大変なことと楽しいことのバランスですよ。夢があるなら追いかければいいし、追うにふさわしい能力があるならば、思った通りにやればいいと思います。何をするにも辛いことがなければ報酬はないですからね。特にこの業界は自営業みたいなものだから、生産のサイクルを回すか回さないかは自営業の本人次第だと思います。

### ■インタビュー者の自己紹介

#### インタビューを終えて

「われわれ研究者は幻のまぼろしを見ていたのかと思ってね」

——この言葉に、私は衝撃を受けました。心という曖昧なものを研究するために、私たちは心をどのように捉えるかを学び、いくつかのはかりを手にします。そんな知識と道具を駆使用する術を持った数多の優秀な研究者たちをもってしても、この「幻のまぼろし」に気づくことができなかったのです。

なぜ河原先生はそれに気づくことができたのでしょうか。それを考えてみると、研究における二つの眼の重要性に辿り着きました。それは現象を俯瞰する眼、そしてはかりを見極める眼です。この二つの眼をもって注意という幻に対峙されていたからこそ、「幻のまぼろし」を発見なさったのではないかと思いました。

#### 心を正確に捉えるために

私は現在、免疫系や内分泌系などの身体反応が意思決定にどのように影響を与えているかについて生理心理学的検討を行っています。生理心理学では、心拍やホルモンなど、生理学的指標を用いることで、心を解明しようと試みます。生理学的指標は時に多くの客観的な情報を私たちに与えてくれますが、一方で、心をはかれないにもかかわらず生理学的指標がひとり歩きをしてしまうという危険を孕んでいます。私自身、河原先生のお話を伺いながら何度ひやりとしたかわかりません。情報量の多いはかりを扱うということは、それだけ慎重に適切に扱わなければいけないということを改めて感じることができました。

心というものの性質上、私たち

がどれだけ研究を重ねても真理に到達することは不可能であり、更新を繰り返し、限りなく真理に近づこうとすることしかできません。ましてや、長い心理学史の中で私が明らかにできることなど、ごくごく僅かなことでしかありません。だからこそ、心理学に携わる者としての誇りと、謙虚さをもって、今持っているはかりの精度をもう一度疑ってみるところから始めたいと思います。

#### さいごに

今回先生とお話しさせていただいて、私たちが取り扱っている心というものがいかに捉えどころのない難しいものであるか、そしていかに探究することの多い興味深いものであるかということを再確認させていただきました。遠くから眺める眼、近くでじっと見つめる眼、様々な視力を養いながら、気をつけているという幻のメタ認知を過信しないように、真摯な態度で研究を楽しんでいきたいと思えます。

- 1 Kawahara, J. (2010) Measuring the spatial distribution of the metaattentional spotlight. *Consciousness and Cognition*, 19, 107-124.
- 2 Kawahara, J. (2010) Identifying a "default" visual search mode with operant conditioning. *Acta Psychologica*, 135, 38-49.
- 3 Kawahara, J. & Kihara, K. (2011) No commonality between attentional capture and attentional blink. *The Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 64, 991-1008.



#### Profile — やまかわ かおり

2008年、仁愛大学心理学科卒業。2010年、名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程を修了し、同研究科博士後期課程に在学中。専門は生理心理学、精神神経内分泌免疫学、ストレス。論文はYamakawa, K., Matsunaga, M., Isowa, T., Kimura, K., Kasugai, K., Yoneda, M., Kaneko, H. & Ohira, H. (2009) Transient responses of inflammatory cytokines in acute stress. *Biological Psychology*, 82, 25-32.など。